

オレのセロの音がゴウゴウ響くと、それがあんまの代わりになって、お前たちの病気が治るといのか。よし、わかったよ。やってやろう。」ゴーシュはちょっとギイギイと糸を合わせてそれからいきなり、野ねずみの子供をつまんでセロの穴から中へ入れてしまいました。「私も一緒について行きます。どこの病院でもそうしていますから」おっかさんの野ねずみはきちがいのようになってセロに飛びつきました。「お前さんも入るかね。」セロひきはおっかさんの

野ねずみもセ口の穴からくぐらしてやろうとしましたが、顔が半分しか入りませんでした。野ねずみはバタバタしながら中の子供に叫びました。「お前、そこはいいかい。落ちる時はいつも教えているように足をきちんとそろえて、うまく落ちるんだよ。」「大丈夫。うまく落ちたよ。」子供のねずみはまるで蚊のような小さな声でセ口の底で返事をしました。「大丈夫さ。だから大声でわめかないでくれよ。」ゴーシュはおっかさん野ねずみを下におろして、それか

ら弓をとって、何とかラブソ  
ディとかいうものをゴウゴウガ  
アひきました。するとおっか  
さんのねずみはいかにも心配そ  
うにその音の具合を聞いていま  
したが、とうとうこらえきれな  
くなったようで「もうたくさん  
です。」大きな声で叫びました